

シャーンティデーヴァの〈廻向〉論

—新旧『入菩薩行論』最終章を中心として— (4)

齋 藤 明

はじめに

これまでに3篇の拙稿により¹⁾、旧本『入菩薩行論』の最終「廻向」章の内容を、新本との異同に留意しつつ、総数66を数える詩頌のテキストと和訳を示しながら考察した。一連の考察の冒頭で指摘したように²⁾、廻向 (pariṇāmanā, [yongs su] bsngo ba³⁾) を直接の論題とする同章は、新旧の両本を比較するとき、偈頌の出入りや順序の相違が目立つことにくわえて、例外的に旧本(敦煌出土本)の偈頌総数(66偈)が現行の新本(サンスクリット本58偈、チベット語訳本57.5偈)に比べて多いのである。これはなぜなのかという点も、内容的な興味にくわえ、筆者がこの章の新旧比較考察に目を向けた一つの理由である。

本稿では、これまでの考察をふまえ、まず旧本に対する唯一の注釈文献(著者・訳者不明)の構成説明を見たうえで、新本の内容と構成に目を転じたい。ただし、紙幅の制約もあるため、今回は新本のテキストと和訳を提示するまでにとどめ、新本の諸注釈による構成理解の考察は次回に行いたい。

I 旧本『入菩薩行論』第9「廻向」章の構成理解 —『入菩薩行論解説細疏』—

すでに論及したように⁴⁾、旧本の『入菩薩行論』(9C 初頭 dPal brtsegs + Sarvajñādeva 訳)は敦煌出土本にのみ伝承され、残念ながら現行のチベット大蔵経・テンギュル(論典の翻訳部)には見られない。しかし、幸いなことに、旧本『入菩薩行論』に対する『入菩薩行論解説細疏』(*Byang chub sems dpa'i spyod pa la jug pa'i rnam par bshad pa'i dka' 'grel*, **Bodhisattvacaryāvātārvyākhyāpañjikā*, D No.3873, P No.5274)と題する著者・訳者不明の注釈が、プトゥン・リンチェンドゥブ(Bu ston Rin chen grub, 1290-1364)の手によって回収され、1334年にシャル寺にテンギュルが納められた際に、新たにチベット大蔵経に編入されて

現在に至っている⁵⁾。

同注釈の最終第9「廻向」章は簡明な内容で、末尾のコロフォンもふくめて翻訳すれば、以下のとおりである。なお、訳文の後に当該箇所テキストを置き、その中の偈頌部分は太字で示す。

「さて今、行為が果報をもつために善根 (*kuśalamūla) を廻向 (*pariṇāmanā) すること、ならびに自らの善友 (*kalyāṇamitra) への報恩により敬意を表すために、第9 [廻向] 章が説かれた。

『さとりにへの行 (菩提行) に入ることを [思念する私の浄善、これによって、すべての生類はさとりにへの行に入る者であれ。] (第1 偈) から、『[袈裟のみをまとっている人に対しても、] 教師のように敬意を表わせ。』 (第65 偈前半) までの間 [の総計 64 偈半の詩頌] により、行為が果報をもつために善根を廻向することが説かれた。

『教説は、[人々による] 受容と [尊重をともなって、長くとどまれ。]』 (第65 偈後半) という2つの四半偈 (pāda) により、教説が長く存続するための廻向が説かれた。

『その恩恵により清浄な知が生じるように、[妙音 [菩薩] に敬意をささげる。その恩恵により、それ (清浄な知) が生長するように、善友に敬意を表する。』 (第66 偈) という [最後の] 1 偈により、報恩による自らの善友に対する敬意の表明が説かれた。

『[入菩薩行論] という 論書 (*śāstra) の名称の意味については、第1章で説明したとおりである。『廻向』という第9章の解説が完了した。それら [第9章の詩頌] の部分の意味はきわめて理解しやすいため、詳説はしない。

『入菩薩行論解説細疏』が完了した。』

(da ni las 'bras bu dang bcas par bya ba'i phyir/ dge ba'i rtsa ba bsngo ba dang/ rang gi dge ba'i bshes gnyen la drin du gzo ba'i sgo nas phyag btsal ba'i phyir le'u dgu pa gsungs te/

bdag gis byang chub spyod pa la zhes bya ba nas/ ston pa bzhin du mchod byed shog ces bya ba'i bar gyis las 'bras bu dang bcas par bya ba'i phyir/ dge ba'i rtsa ba bsngo ba bstan to//

bstan pa rnyed dang zhes bya ba tshig gnyis kyis bstan pa yun ring du gnas par bya ba'i phyir bsngo ba bstan to//

gang gi drin gyis dge blo 'byung zhes bya ba'i tshig su bcad pa gcig gis drin gzo ba'i sgo nas rang gi dge ba'i bshes gnyen la phyag 'tshal ba bstan to//

bstan bcos kyi ming gi don ni le'u dang por bshad pa bzhin no// yongs su bsngo ba zhes bya ba (ba om. P) ste/ le'u dgu pa'i bshad pa rdzogs so// // de

dag gi yan lag gi don shin tu go sla ba'i phyir rnam par ma phye'o//
 byang chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa'i rnam par bshad pa'i dka' 'grel
 rdzogs so// //) (D No.3873, La 249a4-7, P No.5274, La 395b8-396a5)

以上のように、『入菩薩行論解説細疏』の第9「廻向」章に対する解説は簡潔で、全体で66の詩偈からなる同章を、

- ・第1偈から第65偈前半までは、自らの行為がふさわしい果報をもつために、善根を〔他の有情に〕廻向することが説かれ、
- ・第65偈後半は、教説が長く存続することを廻向することが、そして
- ・最終第66偈は、妙音（＝文殊）菩薩によって生まれた清浄な知が善友によってさらに生長させられることから、〔妙音と〕善友への敬意の表明（帰敬）が説かれる、

という構成をもつ章と説明するにとどめている。

II 新本 (BCA) 第10「廻向」章の内容とテキスト

さて、以下では、新本『入菩提行論』*Bodhicaryāvatāra*⁶⁾の第10「廻向」章の総計58偈それぞれの和訳とサンスクリット校訂テキストを置く。なお、テキストの太字部分はMinayev本⁷⁾を修訂した箇所を示し、その根拠については拙論(1)(2)(3)の該当箇所を示した。

- 1 さとりへの行（菩提行）に入ることを思念する私の浄善、これによって、すべての生類はさとりへの行を莊嚴する者であれ。
 bodhisattvacaryāvatāraṃ me yad vicintayataḥ śubham/
 tena sarve janāḥ santu bodhicaryāvibhūṣaṇāḥ//
- 2 すべての方位に、身心の苦難に悩まされる者がいるかぎり、かれらは私のもろもろの善行により、安樂と歓喜の海を得られよ。
 sarvāsu dikṣu yāvantaḥ kāyacittavyathātūrāḥ/
 te prāpnuvantu matpuṇyairiḥ sukhaprāmodyasāgarān//
- 3 輪廻の終わるまで、かれらの安樂は決して消えうせることなかれ。世の人は、絶えることのない菩薩の安樂を得られよ。
 āsaṃsāraṃ sukhajyānir mā bhūt teṣāṃ kadācana/
 bodhisattvasukhaṃ **prāptuṃ bhavatu** avirataṃ jagat//

- 4 世間に、なんであれ諸々の地獄があるかぎり、そこに生きるものたちは、安楽国の安楽と歓喜をもって喜ばれよ。
yāvanto nārakāḥ kecid vidyante lokadhātuṣu/
sukhāvātisukhāmodair modantāṃ teṣu dehināḥ//
- 5 寒さに悩まされるものたちは暖熱を得よ。熱に悩まされるものたちは清涼であれ。菩薩の大雲から生じた海のような水によって。
śītārtāḥ prāpnuvantūṣṇam uṣṇārtāḥ santu śītalāḥ/
bodhisattvamahāmeghasambhavair jalasāgaraiḥ//
- 6 刀葉の森も、かれらには歓喜の森の輝きであれ。また、刺のある綿の灌木は如意樹となれ。
asipatrvanam teṣāṃ syān nandanavanadyutiḥ/
kūṭśālmalivrksās ca jāyantāṃ kalpapādapāḥ//
- 7 雁、鴨、鶯鳥、白鳥などの愛らしく美しい鳴き声をともない、大きな蓮の香りにみちた諸々の池により、地獄の諸方は麗しいものとなれ。
kāḍambakāraṇḍavacakravākahaṃsādikolāhalaramyasobhaiḥ/
sarobhir uddāmasarojagandhair bhavantu hr̥dyā narakapradesāḥ//
- 8 炭の堆積は宝珠の堆積であれ。熱地は水晶の床であれ。衆合〔地獄〕の山々は、善逝にみちた供養の殿堂となれ。
so 'ṅgārāśir manirāśir astu taptā ca bhūḥ sphāṭikakuṭṭimam syāt/
bhavantu saṃghatamahīdharās ca pūjāvimānāḥ sugataprapūrṇāḥ//
- 9 炭火に焼かれた石と剣の雨は、今からは花の雨であれ。またこの、剣による相互の闘いは今、遊戯のための花の闘いであれ。
aṅgārataptopalaśastravr̥ṣṭir adyaprabhr̥ty astu ca puṣpavr̥ṣṭiḥ/
tac chastrayuddham ca paraspareṇa krīḍārtham adyāstu ca puṣpayuddham//
- 10 すべての肉が落ち、ジャスミンのように白い骨の身体で〔地獄の〕ヴァイタラニー河の火のような水に沈む者たちは、私の善行の力によって、神の身体を得て、神の妃たちと〔天上のガンジスたる〕マンダーキニー河に住む者となれ。
patitasakalamāṃsāḥ kundavarṇāsthidehā
dahanasamajalāyāṃ vaitaranyāṃ nimagnāḥ//

mama kuśalabalena prāptadivvyātmabhāvāḥ
saha suravanitābhīḥ santu mandākīnīsthāḥ//

- 11 ヤマ（閻魔）の従者や、恐ろしい鳥と禿鷲は、ここにおいて突然、闇があまねく消えさったのを、恐れ慄きながら見るであろう。「この、楽しみと歓びをもたらす光明は誰のものか。」といて上方を眺め、虚空の中で光り輝く金剛手〔菩薩〕を見て、歓喜の衝撃により悪業が消えうせ、そ〔の金剛手菩薩〕とともにあるであろう。

trastāḥ paśyantv akasmād iha yamapuruṣāḥ kākaḡdhrāś ca ghorā
dhvāntaḡ dhvastaḡ samantāt sukharaṡijanānī kasya saumyā prabhēyam/
ity ūrdhvaḡ prekṣamānā gaganatalagataḡ vajrapāṅiḡ jvalantaḡ
dṛṣṡvā **prā**modyaveḡāḡ vyapagataḡduritāyāḡ tu tenaiva sārḡdham//

- 12 香水と混ざることにより、蓮華の雨はふれ。「幸せに」と、〔その雨が〕地獄の火を消すのが見られよ。「これは何ごとだ」と、突然の幸せに歓喜する地獄に住む者たちに、蓮華手〔菩薩〕の示現あれ。

patatu kamalavrṣṡṡir gandhapāṅiyamiśrāc
cham iti narakavahniḡ **dṛṣyatāḡ** nāśayantī/
kim idam iti sukhenāhlāditanāḡ akasmād
bhavatu kamalapāṅer darśanaḡ nārakāṅāḡ//

- 13 友らよ、来られよ。速やかに来られよ。怖れを除かれよ。われわれは生きている。かの、われわれのためにやって来た、火を怖れさせない有髻の童子（＝文殊師利童子、妙音菩薩）は誰か。その威神力によりすべての災難が消えうせ、歓喜の奔流が起こった。菩提心と、すべての生物の救いの母である同情心とが生じた。

āyātāyāta śīghraḡ bhayam apanayata bhrātaro jīvitāḡ smaḡ
saḡprāpto 'smākam eṣa jvaladabhayakaraḡ ko 'pi cīrīkumāraḡ/
sarvaḡ yasyānubhāvād vyasanam apagataḡ prṡṡiveḡāḡ pravṡṡtāḡ
jātaḡ saḡbḡodhicittaḡ sakalajanaparitrāṅamātā dayā ca//

- 14 君たちはこの方を見よ。その蓮華のような脚は幾百の神々の宝冠によって供養され、その眼は憐憫によって潤み、頭上には、賛歌に巧みな幾千の天女の心地よい歌声ひびく楼閣から、多くの花が激しい雨とふりそそぐのを。このような妙音〔菩薩〕を見て、地獄の者たちには今、歓声あれ。

paśyantv enaḡ bhavantaḡ suraśatamukuṡair arcyamānāḡhṡṡipadmaḡ

kāruṇyād ārdradṛṣṭiṃ śirasi nipatitānekapuṣpaughavṛṣṭim/
 kūtāgārair manojñaiḥ stutimukharasurastrīśahasropagṭair
dṛṣṭvetthaṃ mañjughoṣaṃ bhavatu kalakalaḥ sāmprataṃ nārakānām//

- 15 このように、私の諸々の善行により、かれら地獄の者たちは、心地よく涼しく香りよい風と雨をとまなう、普賢〔菩薩〕を筆頭に現れた諸菩薩の群雲を見て歓喜せよ。

iti matkuśalaiḥ samantabhadrapramukhānāvṛtabodhisattvameghān/
 sukhaśītasugandhavātavṛṣṭiṃ abhinandantu vilokya nārakās te//

- 16 地獄の者たちの激しい苦痛と恐怖は和らげ。すべての悪趣（＝地獄）に棲む者たちは、悪趣から解放されよ。⁸⁾

śāmyantu vedanās tīvrā nārakāṇāṃ bhayāni ca/
 durgatibhyo vimucyantāṃ sarvadurgativāsinah//

- 17 動物（畜生）らの、たがいに喰いあう恐怖は消え失せよ。餓鬼らは、北クル（北俱盧洲）の人々のように幸せであれ。

anyonyabhakṣaṇabhayaṃ tiraścām apagacchatu/
 bhavantu sukhinaḥ pretā yathottarakurau narāḥ //

- 18 餓鬼たちは、聖観自在の手から滴る乳の流れによって満たされよ、清められよ、つねに清涼であれ。

saṃtarpyantāṃ pretāḥ snāpyantāṃ śītālā bhavantu sadā/
 āryāvālokiteśvarakaragalitakṣīradhārābhiḥ//

- 19 盲人は色かたちを見よ、聾者はつねに〔音を〕聞け。妊婦たちは、マーヤー（摩耶）夫人のように無痛に分娩されよ。

andhaḥ paśyantu rūpāṇi śṛṇvantu badhirāḥ sadā/
 garbhīnyās ca prasūyantāṃ māyādevīva nirvyathāḥ//

- 20 衣類・食料・飲料・花環・白檀・装飾、すべての心に願うもの、安寧にみちびくものを得られよ。

vastrabhojanapānīyaṃ srakcandanavibhūṣaṇam/
 mano'bhilasitaṃ sarvaṃ labhantāṃ hitasaṃhitam//

- 21 怖れをいただく者は、恐れなき者となれ。悲嘆にくれる人々は、喜びを得る者

- となれ。不安におびえる人々は、不安のない意志堅固な者となれ。⁹⁾
bhītāś ca nirbhayāḥ santu śokārtāḥ pṛtīlābhinaḥ/
udvignāś ca nirudvegā dhṛtimanto bhavantu ca//
- 22 病める人々は健康になれ。すべての束縛から解放されよ。力失せた人々は、
活力ある者となり、互いに愛情ふかい者であれ。
ārogyaṃ rogiṇām astu mucyantām sarvabandhanāt/
durbalā balinaḥ santu snigdhaśintāḥ paraṃparam//
- 23 道を行くすべての人々にとって、すべての方位は恵み多いものであれ。かれ
らが目的をもって行くとき、そ [の目的] はたやすく成就せよ。
sarvā diśaḥ śivāḥ santu sarveṣāṃ pathivartinām/
yena kāryeṇa gacchanti tad **ayatnena** sidhyatu//
- 24 船路の旅にのぼる人々は、願いがかなう者であれ。安全に岸に到着して、親
族とともに歓ばれよ。
nauyānayaṭrārūḍhāś ca santu siddhamanorathāḥ/
kṣemeṇa kūlam āśādyā ramantām saha bandhubhiḥ//
- 25 荒野の険しい道に迷いこんだ人々は、隊商に出逢えよ。倦みつかれることな
く進め。盗賊や虎などの怖れなしに。
kāntāronmārgapātītā labhantām sārthasamgatim/
aśrameṇa ca gacchantu cauravyāghrādinirbhayāḥ//
- 26 神々は、病や森林などの危険な場所に眠る者、酔った者、酩酊した者や、身
寄りのない子や老人たちを保護されよ。
suptamattapramattānām vyādhyāraṇyādisamkate/
anāthabālavṛddhānām rakṣām kuruvantu devatāḥ//
- 27 人々はすべての不遇から解放され、信と智慧と情けをもち、よい容姿や振る
舞いをそなえ、つねに前生を想起する者であれ。
sarvākṣaṇavinirmuktāḥ śraddhāprajñākṛpānvitāḥ/
ākārācārasaṃpannāḥ santu jātismaṛāḥ sadā//
- 28 あたかも虚空蔵〔菩薩〕のように、尽きることのない資財をもつ者となれ。
争わず、憂いなく、自立して行う者であれ。

bhavantu akṣaya**bhogās** ca yāvad gaganagañjavat/
nirdvandvā nirupāyāsāḥ santu svādhīnavṛttayaḥ//

- 29 気力の乏しい有情らは、気力漲る者となれ。醜い苦行者たちは美しい者となれ。

alpaujasaś ca ye sattvās te bhavantu mahaujasaḥ/
bhavantu rūpasampannā ye virūpās tapasvinaḥ//

- 30 世の女性たちはみな、男性となれ。下賤な人々は高貴な者となれ。ただしかし、慢心のない者となれ。

yāḥ kāścana striyo loke puruṣatvaṃ vrajantu tāḥ/
prāpnuvantūccatām nīcā hatamānā bhavantu ca//

- 31 私のこの福德により、すべての有情は残りなく、すべての罪悪をやめ、つねに善行をなせ。

anena mama puṇyena sarvasattvā aśeṣataḥ/
viramya sarvapāpebhyaḥ kurvantu kuśalaṃ sadā//

- 32 菩提心を捨てず、菩提行に専念する人々は、諸仏に摂取され、魔の所業から遠ざかれよ。

bodhicittāvirahitā bodhicaryāparāyaṇāḥ/
buddhaiḥ parigrhītās ca mārakarmavivarjitāḥ//

- 33 これらすべての有情は、無量の寿命をもつ者となれ。つねに幸せに生きよ。「死」の語も消えうせよ。

aprameyāyuśaś caiva sarvasattvā bhavantu te/
nityaṃ jīvantu sukhitā mṛtyuśabdo 'pi naśyatu//

- 34 すべての方位は、如意樹の園をともなって喜ばしいものとなれ、ブツダとブツダの本質をもって生まれる者（＝仏子、菩薩）に満ちたものとなれ、教法の心地よい響きをともなって。

ramyāḥ kalpadrumodyānair diśaḥ sarvā bhavantu ca/
buddhabuddhātmapajakīṛṇā dharmadhvanimanoharaiḥ//

- 35 大地はあらゆるところ砂利などがなく、手のひらのように平らで柔らかく、瑠璃からなるものとなれ。

śarkarādivyāpetā ca samā pāñītalopamā/
mṛdvī ca vaiḍūryamayī bhūmiḥ sarvatra tiṣṭhatu//

- 36 菩薩の大集会は、あまねく坐を占めよ。みずからの輝きにより大地を荘厳せよ。

bodhisattvamahāparśanmaṇḍalāni samantataḥ/
niṣīdantu svasobhābhir maṇḍayantu mahītaḥ//

- 37 教法の響きは、すべての生き物によって、絶え間なく聴かれよ。鳥たちから、すべての樹木から、光から、そして虚空からも。

paḥṣibhyaḥ sarvavṛkṣebhyo raśmibhyo gaganād api/
dharmadhvanir aviśrāmaṃ śrūyatāṃ sarvadehibhiḥ//

- 38 かれらはつねに、ブツダとブツダの子（仏子、＝菩薩）に遇われよ。果てしない供養の雲をもって、世界の師（＝ブツダ）を供養されよ。

buddhabuddhasutair nityaṃ labhantāṃ te samāgamam/
pūjāmeghair anantaiś ca pūjayantu jagadgurum//

- 39 神はふさわしい時節に雨を降らされよ。そして穀物は稔り豊かになれ。また世間は繁栄せよ。王は正しくあれ。¹⁰⁾

devo varṣatu kālena śasyasampattir astu ca/
sphīto bhavatu lokaś ca rājā bhavatu dhārmikāḥ//

- 40 薬草は効力あれ。真言は唱える人々に結果をもたらせ。ダーキニー（鬼女）やラークシャサ（羅刹）らは悲心に満ちたものとなれ。

śaktā bhavantu cauśadhyo mantrāḥ sidhyantu jāpinām/
bhavantu karuṇāviṣṭā dākinīrākṣasādayaḥ//

- 41 いかなる有情も苦しむことなかれ。罪あることなかれ。病あることなかれ。卑劣であることなかれ。軽蔑されることなかれ。いかなる人も、落胆していることなかれ。

mā kaścid duḥkhitaḥ sattvo mā pāpī mā ca rogitaḥ/
mā hīnaḥ paribhūto vā mā bhūt kaścid durmanāḥ//

- 42 僧院は〔経典の〕読誦や学習に満ちて栄えよ。僧伽の和合はつねに保たれ、僧伽の目的は成就せよ。

pāṭhasvādhyāyikalilā vihārāḥ santu susthitāḥ/
nityaṃ syāt saṃghasāmagrī saṃghakāryaṃ ca sidhyatu//

- 43 比丘たちは、遠離をえて学処を愛せよ。すべての散乱心をはなれ、ふさわしい心で瞑想修習せよ。

vivekalābhinaḥ santu śikṣākāmāś ca bhikṣavaḥ/
karmanyacittā dhyāyantu sarvavikṣepavarjitāḥ//

- 44 比丘尼たちは [遠離を] えて、口論や煩いをはなれてあれ。また、すべての出家者は戒めを犯すことなかれ。

lābhinyaḥ santu bhikṣuṇyaḥ kalahāyāsavarjitāḥ/
bhavantu akhaṇḍaśīlāś ca sarve pravrajitās tathā//

- 45 悪い行ないを習慣とする人々は、[その行為と結果に] 恐れおののき、つねに罪悪を滅ぼすことを喜ぶ者であれ。善い生存をえて、そこで誓いを全うせよ。

duḥśīlāḥ santu saṃvignāḥ pāpakṣayaratāḥ sadā/
sugater lābhinaḥ santu tatra cākhaṇḍitavratāḥ//

- 46 賢者たちは、歓待され、供養を受け、施物をもって生きる者であれ。[心の] 流れは清淨となり、あらゆる方向に名声が知れわたるようになれ。¹¹⁾

pañḍitāḥ **satkr̥tāḥ** santu lābhinaḥ pañḍapātikāḥ/
bhavantu śuddhasaṃtānāḥ sarvadikkhyātakīrtayaḥ//

- 47 悪道の苦を受けず、難行をなさずとも、世人は、ただ一つの神のような身体をもって、速やかにブツダたることを得られよ。

abhuktvāpāyikaṃ duḥkhaṃ vinā duṣkaracaryayā/
divyenaikena kāyena jagad buddhatvam āpnuyāt//

- 48 すべての等覚者 (=仏) は、すべての有情によって、多くの仕方で供養されよ。ブツダの不可思議な安樂をもって、きわめて幸ある方となれ。

pūjyantāṃ sarvasaṃbuddhāḥ sarvasattvair anekadhā/
acintyabauddhasaukhyena sukhinaḥ santu bhūyasā//

- 49 菩薩たちの生類のための願いは成就せよ。かの師主たちの考えるところは、有情たちのために成就せよ。¹²⁾

sidhyantu bodhisattvānāṃ jagad**arthamanorathāḥ**/

yac cintayanti te nāthās tat sattvānām samṛdhyatu//

- 50 独覚たちも幸あれ、声聞たちもまた。神、アスラ（阿修羅）、人間によって、つねに丁重に供養されよ。

pratyekabuddhaḥ sukhino bhavantu śrāvakās tathā/
devāsuranarair nityaṃ pūjyamānāḥ sagauravaiḥ//

- 51 妙音（＝文殊）の恩恵により、私はつねに前世の想起と出家とを得たい。歓喜地にいたるまで。

jātismaratvaṃ pravrajyām ahaṃ ca prāpnuyām sadā/
yāvāt pramuditām bhūmiṃ mañjuḥṣaparigrahāt//

- 52 どれほど乏しい食料によっても、私は力に満ちて時をすごしたい。すべての生において、遠離して住むための資具を得たい。

yena tenāśanenāhaṃ yāpayeyaṃ balānvitāḥ/
vivekavāsaśamagrīm prāpnuyām sarvajātiṣu//

- 53 お目にかかりたいと願ひ、また何かをたずねたいと願うとき、私はかの師主・文殊〔菩薩〕に妨げなくお目にかかれまますように。

yadā ca draṣṭukāmaḥ syām praṣṭukāmaś ca kimcana/
tam eva nāthaṃ paśyeyaṃ mañjunātham avighnataḥ//

- 54 十方の天空の果てにもいたるすべての有情の利益を成就するために、文殊が行われるのと同じ所行が、私にあれ。¹³⁾

daśadigvyomaparyantasarvasattvārthasādhane/
yathā caratī mañjuśrīḥ saiva caryā bhaven mama//

- 55 虚空が存続するかぎり、また世界が存続するかぎり、私は世界の苦悩を滅ぼす者として存続していきたい。¹⁴⁾

ākāśasya sthitir yāvad yāvaca ca jagataḥ sthitiḥ/
tāvan mama sthitir bhūyāj jagadduḥkhāni nighnataḥ//

- 56 いかなる苦悩が世界にあらうとも、そのすべては私に成熟せよ。そして、すべての菩薩の淨行によって、世界は安樂であれ。

yat kiṃcij jagato duḥkhaṃ tat sarvaṃ mayi pacyatām/
bodhisattvaśubhaiḥ sarvair jagat sukhitam astu ca//

- 57 世界の苦悩に対する唯一の医薬であり、すべての繁栄と幸福の源である教説は、[人々による] 受容と尊重をともなって、長くとどまれ。

jagadduḥkhaikabhaiṣajyam sarvasampatsukhākaram/
lābhasatkārasahitaṃ ciraṃ tiṣṭhatu śāsanam//

- 58 妙音 [菩薩] に敬意をささげよう。その [妙音菩薩の] 恩恵により清浄な知がある。善友に敬意を表する。その [善友の] 恩恵によりそれ (清浄な知) は生長する。

mañjuḥṣaṃ namasyāmi yatprasādān matih śubhā/
kalyāṇamitraṃ vande 'haṃ yatprasādāc ca vardhate//

Ⅲ 小結

以上、本稿は旧本の構成を略説する著者・訳者不明の『入菩薩行論解説細疏』にみる旧本最終「廻向」章の総計 66 偈に関する構成理解を示したのち、新本の総計 58 偈の和訳とテキストを提示した¹⁵⁾。

新本が採用する韻律は、mātrā-cchandas の一種である Aupacchandāsika 韻律の第 15 偈をのぞき、いずれも akṣara-cchandas である。第 1 から第 6 までの 6 偈は Śloka (=Anuṣṭubh, 8 音節 × 4), 第 7, 8, 9 偈は Indravajrā (11 × 4), 第 10 と第 12 偈は Mālinī (15 × 4), 第 11, 13, 14 の 3 偈は Sragdharā (21 × 4) であり、第 16 偈から最終第 58 偈まではすべて Śloka によって構成される。

なお、新本第 10「廻向」章のテキストは Minayev 本を修訂する形で提示したが、太字部分からも分かるように、913 偈からなる BCA の全体に関して、再校訂が求められている。

また、注 8、9、12 が例証するように、新本のロデンシェーラブ等によるチベット語訳 (BSA-3) には新たに増広された箇所の見落としや、テキストが部分的に変更されたにも関わらず、先行するペルツェク訳 (BSA-1) を不適切に踏襲した跡がうかがえるなど、翻訳としての難点は少なくない。

『入菩薩行論』の最終「廻向」章の新旧テキストの内容と特徴、ならびに旧本 66 偈に対する著者不明の唯一の注釈にみる構成理解は以上のとおりである。次回は、新本 58 偈に対する注釈者の構成理解に目を向けたい。

【注】

- 1) 斎藤明「シャーンティデーヴァの〈廻向〉論—新旧『入菩薩行論』最終章を中心として—(1)『成田山仏教研究所紀要』40, 2017, pp. 57-69; 同「シャーンティデーヴァの〈廻向〉論—新旧『入菩薩行論』最終章を中心として—(2)『成田山仏教研究所紀要』41, 2018,

- pp. 57-71; 同「シャーンティデーヴァの〈廻向〉論—新旧『入菩薩行論』最終章を中心として—(3)」『成田山仏教研究所紀要』42, 2019, pp. 63-83.
- 2) 上掲拙論(1), 2017, pp. 57-59 参照。
 - 3) 章題の訳語の相違については、前掲拙論(3), 2019, pp. 75-76 を参照。
 - 4) 拙論「敦煌出土アクシャヤマティ作『入菩薩行論』とその周辺」『チベットの仏教と社会』1986, pp. 95-100 参照。
 - 5) なお、同注釈の最終 2 章、すなわち第 8 章「般若の説示」および第 9 章「廻向」のみを別出した注釈文献が『入菩薩行論解説』（*Byang chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa'i rnam par bshad pa, *Bodhisattvacaryāvatāravākyā*, D No.3877, P No.5279）と題して同時にチベット大蔵経に編入されている。
 - 6) 新本のサンスクリット語写本の題名は『入菩提行論』が通例であるが、そのチベット語訳（BSA-3, D No.3871, P No.5272）は旧本（BSA-1）と同様に、『入菩薩行論』（*Byang chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa, *Bodhisattvacaryāvatāra*）の表題を保持する。旧本のタイトルについては、前掲拙論(3), 2019, pp. 75-76 参照。
 - 7) I. P. Minayev, “Bodhicaryāvatāra”, *Zapiski Vostochnago Otdeleniya Imperatorskago Russkago Arkheologicheskago Obshchestva* 4, 1890, pp. 153-228.
 - 8) 前掲拙論(2), 2018, p. 66 (n.5) に言及したように、この偈頌はサンスクリット本にのみあり、チベット語訳（敦煌本 St.628, 629, 630-I および現行諸版本）には欠落する。新本（BSA-3）の翻訳者ロデンシェーラブ等が本偈の挿入を見落としたためと考えられようか。
 - 9) 日本にはこの次に、「病気の有情はみな、ただちに病から解放されよ。生類のすべての病は、けっして発症することなかれ。」(St.629 Ka 37b3: *sems can nad pa ci snyed pa// myur du nad las thar par gyur// 'gro ba'i nad ni ma lus pa// rtag tu 'byung ba myed par shog//*) という 1 偈がある。この偈頌は現行のサンスクリット本（BCA）に欠くが、そのチベット語訳版本（BSA-3）には、旧本＝敦煌本（BSA-1）とほぼ同じく、*sems can nad pa ji snyed pa// myur du nad las thar gyur cig// 'gro ba'i nad ni ma lus pa// rtag tu 'byung ba med par shog//* (D La 38b3, P La 43b2-3) とある。これは、注 8 の例とは逆に、新本の訳者ロデンシェーラブ等が新本における削除を見落とし、旧本のチベット語訳（BSA-1）を結果として残してしまったためといえようか。
 - 10) 以下の新本の 39 偈から 45 偈までの 7 偈は、日本では第 47 偈から第 53 偈に相当する。日本ではここに、新本の第 47 偈から第 54 偈に相当する 7 偈が配置されていた。（新本の第 49 偈と第 50 偈は、旧本の第 41 偈が 2 つの偈頌に増広されたもの。）拙論(3), 2019, p. 77 (n.4) 参照。
 - 11) この新本第 46 偈は旧本になく、後代の挿入偈と考えられる。
 - 12) 注 10 で言及したように、旧本は、新本第 49 偈と第 50 偈それぞれの前半偈を合体した 1 偈を第 41 偈としている。なお、拙論(3), 2019, p. 77 (n.4) でふれたように、新本のチベット語訳（BSA-3）は、第 49 偈後半部の訳文は適切に付加したものの、第 50 偈の

後半部の翻訳を欠く。これは、新本の訳者ロデンシェーラブ等が同半偈の訳文を補いそびれた結果と推察される。新本 (BCA) 最終「廻向」章の偈頌総数が 58 であるのに対して、対応するチベット語訳は偈頌総数 57,5 と、半偈分少ないのもこれに起因している。

- 13) 新本は、この第 54 偈の後に旧本で置かれていた総計 12,5 偈 (旧本 46, 54-65ab) をすべて削除している。
- 14) 第 55 偈から第 57 偈 ab は新本にのみある増補部分で、旧本に欠く。
- 15) 新本 BCA の現代語訳については、A. Saito, “Śāntideva,” *Brill’s Encyclopedia of Buddhism*, Jonathan A. Silk et al. ed., vol. II, 2019, Leiden: Brill, pp. 391-397 (esp. 394) 参照。また、その後、P. Schmidt-Leukel, *Buddha Mind — Christ Mind: A Christian Commentary on the Bodhicaryāvatāra*, Leuven-Paris-Bristol: Peeters, 2019 が出版され、その Part II: pp. 109-515 に E. Steinkellner and C. Peck-Kubaczek による最新の英訳と詳解が含まれる。